

感染症と闘ってくれている医療従事者の皆さんへ ありがとうメッセージ



春風小イチローこと深田哲男さんとシンちゃん



加西病院で誕生しました 池田 穂高くん、伊吹くん



加西病院で入院しました 北村登志枝さん



加西病院で警備してます 佐藤多香子さん

届けよう
感謝とエールを
広げる“ありがとう”の輪



少年サッカー「加西FC」のみなさん



北条ならの実こども園の園児たち (あおぞら組、かがやき組)



看護師の卵たち
播磨看護専門学校のみなさん



加西病院サポーターの会のみなさん



スマートフォンでQRコードを読み取ると
皆さんのメッセージ動画が再生されます。

救急隊員に聞く

もうひとつの闘い 加西消防署



高性能の防護服で自らの命を守る (写真上)
オゾン消毒装置の導入により、約4時間かかっていた消毒がわずか20分でできるようになった。(写真右)

自分たちの命も守る

今回の特集で取り上げた加西病院とタッグを組み、ともにコロナと闘っているのが北はりま消防組合の救急隊員。加西市内で年間約2000件の出動を行う隊員たちは、病院よりも先に患者と接し、搬送するすべての患者に、感染の可能性があるとというリスクと日々闘いながら任務に就いています。

ウィルス等が付着している可能性が高いので、一度出動すると帰ってくるまで脱ぐことは許されず、トイレも行けず水分も補給することはできません。救急担当の長濱消防司令は「受け入れ病院が西宮や豊岡まで広がってきており、距離も長くなってきています。最近搬送したものではありませんでした」と苦労を語ってくれました。



全滅防ぐ危機管理

従来から、消防の勤務体制は24時間勤務の2交代制となっており、係が2つあります。一方の勤務が終了すると次の係と勤務開始の時間を重ね、引継ぎの時間とします。「コロナの感染拡大に伴い、署では2つの係の全滅を防ぐために、互いの時間は重ねず、顔も合いません」と長濱消防司令。仮に1つの係に感染者が発生した場合、もう1つの係に感染させることのないように、引継ぎも顔を合わせて行わず、事務所内の行き来も動線を変えて極力触れないようにされています。

加西病院の重要性

この1年を振り返ると、加西病院の存在が大きかったと言えます。「全国的に見て、コロナの感染の可能性がある患者の受け入れは、どの医療機関も嫌がります。でも加西病院は違います。重要性がよく分かった。地域にこのような病院があることは非常に大きい」と話されました。これからの救急隊員の皆さん、がんばってください。